

ZENBI

全国美術館会議機関誌

March 2021 [Vol.19]

Mar. 2021



2020年3月にオープンした神楽坂の新たなアートギャラリー√K Contemporaryは、戦後から現代、そして未来を担う若手まで幅広いアーティストをご紹介します。これからのアートシーンを創造していく、まさに次世代型アートギャラリーです。

Exhibition Schedule 2021

堀浩哉+堀えりぜ「記憶するために—わたしは だれ？」

2月13日(土)～3月26日(金) Space √K

六田知弘「時のアイコン 2021」

3月11日(木)～3月26日(金)

堀江菜「声よりも近い位置」五島記念文化賞美術新人賞研修帰国記念 <開催予定>

4月3日(土)～5月15日(土) √K Contemporary

4月3日(土)～4月17日(土) Space √K

5月29日(土)～6月12日(土) 加島美術



〒162-0836
東京都新宿区南町 6
Tel:03-6280-8808
Fax:03-6280-8809
Email:info@root-k.jp
11:00-19:00
休廊:日・月・祝
*会期中は祝日も営業

@rootkcontemporary
@rk_contemporary
@rk_contemporary

√k Contemporary

「牛込神楽坂駅」都営地下鉄大江戸線 A2出口 徒歩5分/「飯田橋駅」東京メトロ B3出口、JR 西口 徒歩10分/「神楽坂駅」東京メトロ東西線 神楽坂口 徒歩12分

CONTENTS

ブロック報告

- 2 [北海道] コロナ禍における博物館活動と国立アイヌ民族博物館の開館 霜村紀子
- 4 [東北] 新型コロナウイルス感染症が拡大 東北地区美術館の動向 池田良平
- 6 [関東] コロナ禍の現場からみえてきたものアートの逞しさとしなやかさ 堀内重見
- 8 [東京] コロナ禍を共に生きる—東京都内の区立美術館 山田真規子
- 10 [北信越] コロナ禍中での新潟県立美術館の対応 桐原 浩
- 12 [東海] コロナ禍における美術館 青山訓子
- 14 [近畿] コロナ禍の下で開催された展覧会 松川綾子
- 16 [中国] コロナ禍における感染症防止対策についての報告 河野通孝
- 18 [四国] コロナ禍、休館から開館へ 竹崎瑞季
- 20 [九州] コロナと水害、美術館と展覧会 林田龍太

部会報告

- 22 — 保存研究部会 安藤里恵
- 23 — 教育普及研究部会 中村貴絵
- 24 — 情報・資料研究部会 川口雅子
- 24 — 小規模館研究部会 坂上義太郎
- 25 — 美術館運営制度研究部会 安田篤生
- 25 — 地域美術研究部会 藤崎 綾

賛助会員各社 26

広報委員会の発足について 27

事務局から 28

新しい日常下における全国美術館会議のいろいろ 28

広報委員会設置と今後について 29

編集後記 30

投稿要領 31

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 32

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.19 2021年3月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

ISSN 2186-7259

[編集] (一社)全国美術館会議広報部

[発行者] (一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

[デザイン] 宮谷一欵 [印刷] 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

コロナ禍における博物館活動と 国立アイヌ民族博物館の開館

霜村紀子(しもむらのりこ・国立アイヌ民族博物館)



2020年2月、北海道は新型コロナウイルス感染者が全国最多となり、28日に北海道から緊急事態宣言が発令された。感染者の多い札幌周辺の美術館・博物館は臨時休館となり、イベントは中止、感染者ゼロの地域では状況を見守り、3月末の解除を待った。学校も休校となったため、北海道博物館が家でも楽しんで学べる内容を「おうちミュージアム」としてホームページで発信を開始した。北海道博物館が全国に呼びかけ、賛同したミュージアムが参加し、現在では200館を超えている。その後、北海道立の美術館・博物館等が展覧会やコレクションを紹介する動画「北海道リモート・ミュージアム」の配信も各館で始まった。

3月末に北海道は一時的に取東方向に向かったが、4月には首都圏など大都市の緊急事態宣言が発令され、まもなく北海道にも第2波が訪れ、特定警戒都道府県に設定されたため、5月末まで不要不急の外出や都市間移動が制限された。

コロナ禍でなければ、4月24日にウポポイ(民族共生象徴空間)が白老に誕生し、国立アイヌ民族博物館が開館、オリンピックイヤーにアイヌ文化を世界に向けて発信するはずであった。2度の開館延期の経緯を振り返るとともに、北海道ブロックの現状を報告したい。

2019年秋に国立アイヌ民族博物館の建物が完成、11月に準備室が白老に移転し、半年後の開館という厳しい日程を実現するべく、館内は至る所で工事中、大量の物品が搬入されるなか、職員は

会議を重ね開館準備に取り組んできた。

3月には資料の展示作業が始まり、展示が完成形に近づいてきた。その矢先に、新型コロナウイルス緊急事態宣言である。職員や業者は出張が制限され、現場での作業や打合せ、工場生産や物流にも影響し、納品や工事が遅れる事態となった。4月に新しい職員を迎えたものの、開館が5月29日に延期と発表され、在宅勤務が始まり、開館の目処が立たないまま、2度目の開館延期が発表され、具体的な開館日は一切示されなかった。

例年、GWに向けて各館で華々しく展覧会が始まる。2020年は、博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインに基づき、検温や消毒液設置や入場制限等の万全の対策をとり、緊急事態宣言の解除を待ちながら、展覧会やイベントの開催可否と会期の調整が行われた。「美術館に行こう! ディック・ブルーナに学ぶモダンアートの楽しみ方」展(北海道立旭川美術館、4月25日～6月28日)等は開催中止、「キスリング展 エコル・ド・パリの巨匠」(北海道立近代美術館、4月25日～6月21日から5月26日～6月28日に変更)、「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」(札幌芸術の森美術館、4月25日～6月28日から6月1日～8月23日に変更)等は会期を変更した。

渡航制限や移動の自粛等により、夏から秋にかけて、海外から作品を借用する「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」(北海道立近代美術館、7月4日～9月6日)等は開催中止、7月

には「札幌国際芸術祭2020」(12月開催予定)も開催中止を発表した。収蔵作品中心の展覧会に変更する館が多かったが、道内や近隣の所蔵品で企画構成された展覧会は開催され、改めて自館の収蔵品と近隣地域の連携の重要性を感じた。

ウポポイでは6月に地元の白老町民に内覧会を開催した。公園内の各施設では、木彫や刺繍、食事等の参加体験型プログラムを準備してきたが、感染防止対策のため中止となり、舞踊や語りは屋外ステージでの実施となった。博物館でも、タッチパネル式の映像コンテンツは運用しないこととした。

7月12日に、ついにオープン。急遽、ウポポイ入場及び博物館入館について、それぞれに予約システムを導入したが、博物館も舞踊も満足に見学できないという苦情が寄せられた。8月から教育旅行の団体が増え、10月には来場者は12万人に達した。

筆者も都市間移動を自粛していたが、回顧展「後50年 神田日勝 大地への筆触 ここで描く、ここで生きる」(神田日勝記念美術館、7月11日～9月6日、北海道立近代美術館、9月19日～

11月8日)は2会場で観覧できた。昨年、朝ドラの青年画家のモデルとして全国で知られた鹿追の農民画家である。日勝が描く農耕馬や牛、トタン屋根や板葺きの家、懸命に力強く描かれた絵の中に昭和の開拓民の暮らしがにじみ、それぞれの記憶の中の生活と重なり、懐かしく愛おしい。日勝が地元で愛される理由の一つである。筆者は1978年の回顧展「荒野に燃ゆ 神田日勝の世界」ポスターで日勝を知り、その後の顕彰活動や美術館建設運動等も注目してきた。今回の回顧展では、当時の美術界の動向、作家や作品等を丹念に情報収集し、地域の画家から脱却し、一人の画家・神田日勝に迫る側面が強く感じられた。

コロナ禍で、博物館・美術館ホームページのコンテンツが充実してきた。だが、自然や地域に根ざした文化に触れるには、やはりその土地を訪れたい。ぜひ北海道、ウポポイを訪れてほしい。ポロト湖の心地よい風に吹かれて語りや唄を聞き、伝統のコタンを散策し、湖に浮かぶ丸木舟を眺め、国立アイヌ民族博物館をご覧いただき、アイヌ文化に触れていただきたい。



開業記念式典



国立アイヌ民族博物館 基本展示室

新型コロナウイルス感染症が拡大 東北地区美術館の動向

池田良平(いけだりょうへい・天童市美術館)



2020年上半期の時評を記すとすると、どのブロックも避けて通ることができない新型コロナウイルス感染症問題。どの地区も同じような報告になってしまう恐れがあるが、東北ブロック各施設が政府の発令した緊急事態宣言に対してとった行動について記しておきたいと思う。

政府は2020年4月7日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を宣し、緊急事態措置を実施すべき区域を7都府県とし、13都道府県を特別警戒都道府県とした。この緊急事態措置は16日に全国に拡大され、この前後に全国美術館会議正会員を含む多くの美術館・博物館が臨時休館となっている。さらに、4月17日、安倍内閣総理大臣記者会見で5月6日まで外出自粛をお願いする発言があり、5月6日を目前にした4日には緊急事態宣言を5月末日まで延長する決定がなされた。14日には全国8都道府県を除く39県において、緊急事態宣言が解かれ、東北ブロックはすべての県が緊急事態宣言を解かれた。

東北ブロックは感染者の広がりが他地域と比べると遅く、特に岩手県は感染者報告が全国で一番遅い県となった。このたび、東北ブロックの全国美術館会議正会員ホームページを閲覧し、臨時休館の状況、企画展開催の状況、その他イベントに対する対応などを調査した。ホームページの情報で確認しづらい館については直接電話で対応情報を聞き取った。

さて、東北ブロック加盟館の対応を見てみると、

県ごとに対応が似通っていることが確認できた。臨時休館が早いタイミングから始まった県は山形県で4月7日前後から臨時休館となった。臨時休館が解かれた日も比較的早く5月10日という館が多い。青森県は4月11日前後から臨時休館となった。臨時休館が解かれた日はばらつきがあり、5月21日にはほとんどの館が開館している。福島県内の加盟館は冬期休館を行っていた諸橋近代美術館を除くと山形県より約2週間遅い17日後に臨時休館が始まっている。そして、臨時休館が明けた日は比較的遅く6月に入ってからという館が大半となっている(福島県立美術館は5月11日から開館)。宮城県も福島県内の加盟館と同じようなタイミングで臨時休館がはじまり、5月18日までにほとんどの館が開館している。開館が始まるタイミングは福島県より早くなっている。秋田県内の加盟館の臨時休館は宮城県より遅く始まり4月21日には加盟館すべてが臨時休館となった。再び開館となったタイミングは5月11日、12日、21日とバラバラである。岩手県内の加盟館はそれぞれ臨時休館に入るタイミングが東北6県では一番遅く(萬鉄五郎記念美術館は3月3日から臨時休館)、再び開館した日も比較的早い(萬鉄五郎記念美術館と深沢紅子野の花美術館は6月1日まで休館)。

再び開館した各館は臨時休館中に開催できなかった企画展、そしてその後の展覧会スケジュールの調整に時間を取られている。緊急事態宣言が

解かれたとはいえ、多くの人の移動を生み出す企画展の開催は開催の是非を問われ、年度の後半に会期変更、次年度以降の企画展として開催するなどを強いられた。聞き取りを行った館からは、秋に開催予定の企画展の準備を行うはずだった春から夏の期間に移動自粛が求められ、借用・調査に出向けない故に展覧会の開催が延期となったという話も聞き取れた。企画展中止を決定した館は収蔵品展で対応し、既に展示が完了していた館は企画展の会期を後ろに伸ばして対応した館もあるが、企画展開始直後に非常事態宣言となり、わずか数日で終了した企画展も確認できた。

このように新型コロナウイルス感染症感染拡大状況の中で他県に出向き展覧会を調査する機会ほとんどなく、本来であれば注目した展覧会の内容を紹介するべきところが展覧会を開催できない状況をレポートすることとなり大変心苦しく思っている。最後に山形美術館で開催された収蔵品に

よるテーマ展「やま・かわ・やまがた」(10月9日～11月1日)をレポートしてみたい。この展覧会では山形にゆかりのある画家が描いた風景作品をとおして、観覧者が自然を見つめ直す機会を提供するべく企画された。会場には山形の風景が多数展示され、改めて山形美術館のコレクションが充実していることを実感できた。山形美術館は館の性質上、収蔵品を展示するスペースに限りがあり、吉野石膏コレクション(印象派を中心とした西洋絵画)、長谷川コレクション(近世絵画)、新海竹太郎・竹蔵コレクション(彫刻)、服部コレクション(現代フランス絵画)の展示でいっぱいになっている感がある。このほかにも優れた収蔵品がありながら、公開の機会が少なく、残念に思うことが多々あったが、このたびの展示はとても良い機会であったと思う。企画展が開催できない期間、収蔵品に目を向けた期間でもあったと感じている。



山形美術館「やま・かわ・やまがた」展 会場風景

コロナ禍の現場からみえてきたもの アートの逞しさとしなやかさ

堀内重見 (ほりうちじゅうけん・北鎌倉 葉祥明美術館)



本稿前号で執筆された宇都宮美術館の橋本優子氏が「ポスト東日本大震災、新型コロナウイルス感染症時代の情報デザイン」と題してデジタルコンテンツの未来と美術館の役割について、深い洞察力を持って論評をされていたのは記憶に新しい。本稿では、その点を踏まえつつ、新型コロナウイルスに翻弄された4月から10月までの期間を記録的な意味合いを附して、寄稿したいと思う。

当館が所在する鎌倉市では、“緊急事態宣言”が発出される1ヶ月以上も前に、感染者の報告がなされ、早めの対応措置が取られた。鎌倉市竊木清方記念美術館では2月28日から、図書館などの市の施設と合わせて臨時休館となり、その後、4度の延長を経て6月5日に再開する、という手探りの状態が続いた。ほとんどの館の休館は“緊急事態宣言”の期間と重なっていたが、5月14日に39県が解除され、次いで5月25日に特定警戒都道府県で解除されるという2段階の解除だったこと、各館の実情によって休館した時期が様々であったことを記しておく。

再開後は、今やマナーと言えるマスクの着用は当然のこと、手指の消毒、検温の「お願い」の他、入館者リストの作成、館内の消毒作業など、自分たちの安全を確保しながらの業務が増えた。特に予防策として有効とされる「換気」は、作品保護の観点と矛盾する行為で、空調による換気があるというもの、館によっては対応に苦慮されていると聞く。前出の竊木清方記念美術館では、鑑賞

者のいない時間を40分つくり、当初は日に5回、現在は日に2回の換気を施している。また、東京文化財研究所からのアドバイスもあり、次亜塩素水等の散布や、オゾンを出すイオン発生器は使用しないようにしているとのこと。

社会情勢としてリモートワークが定着してきたが、我々の業務ではやはり現場に立つことが重要であり、来館者により深く作品にふれてもらう機会を作ることは使命でもある。しかし、ここでも感染症対策のため、入館者数の制限を設けることや、茨城県近代美術館のようにインターネットによる予約制を導入する館もあり、対応が分かれる。また、民間チケット業者との連携による電子チケットの導入も進み、“非接触”への効果を上げている。イベント参加人数を半分以下の規模にするのも、もはや当面の既定路線だ。先に述べた換気と同じように、ここでも矛盾することとなり、頭の痛い問題だ。

そんな中、前出の茨城県近代美術館では4月18日から5月11日まで休館したのち、翌12日から6月28日まで開催された「没後10年 平山郁夫 シルクロードコレクション展」には、想定より少なかったものの15,000人を越える入館があった。作品の魅力はもちろんだが、外出自粛が大きな影響を与えているにも関わらず、人々が芸術を求めていることへの熱気を感じ、美術館本来の姿を見られたことにとても勇気づけられる。ちなみに同館では“キャッシュレス決済限定企画展”とい

う取り組みをコロナ禍以前からされている。美術館の沿革も背景にあるとのことだが、参考にしてみたい企画だ。

デジタルコンテンツを使った新しい取り組みも一気に浸透した。例えば当館ではZoomによるイベントの様子を生配信や録画配信を始めた。ステイホームが叫ばれる中で生まれた苦肉の策であったが、今後も続けたいと思う。また、小山市立車屋美術館では作家自らが作品について語る姿をYouTubeで広く知らしめるなど、今後も活用できるノウハウを蓄積している。佐野市立吉澤記念美術館では“おうちで吉美”の展開が始まった。これまでもSNSを活用して情報発信している館は多かったものの、その熟練度、活用度の差が大きかったように思う。ここにきて確実に美術館運営における重要な施策の一つとして深化した。

効率と成果を追及してきた人類は、目に見えないウイルスにより急激な変化を余儀なくされている。アートはその効率と成果とはもともと違う次元にあったし、これからもそれは変わらないということとはハッキリしている。より“本物”にこだわっていかなければ、その座標を見失いそうになる。新しい時代の流れに寄り添いながら、当たり前のこ

とをきちんと実直に誠実に行う姿勢こそが、来館者への想いに応える術であるし、作品を預かる私たち自身が芸術を探求する心を養い、提供していくという責務と使命を改めて強く自覚する半年ではなかったか。アーツ前橋の“再開メッセージ”には、その熱い想いが凝縮された文章が公開されている。是非、ご一読頂ければと思う。

最後に令和元年東日本台風で甚大な被害があった川崎市市民ミュージアムにふれて、本稿を終わりたいと思う。

コロナ禍の中でも職員による収藏品レスキュー作業が行われ、カビ等の繁殖が活発になる6月までに26万点におよぶ作品の燻蒸及び運び出しが終了した。関係者みなに声を揃えて「努力の賜物」と言わしめた結果であり、レスキュー活動の意義と実行力が見事に機能している証しである。同館ではオンラインショップを開設した他、ミューザ川崎を借用して開催する市民美術展の募集を始めるなど、本来の業務に一部戻りつつある、とのこと。

本稿の執筆にあたっては、電話でインタビューを行った。対応頂いた各位には多忙中、時間を割いていただき心より感謝申し上げます。



川崎市市民ミュージアムにおけるレスキューの様子



当館の臨時休館の告知

コロナ禍を共に生きる —東京都内の区立美術館

山田真規子(やまだ まきこ・目黒区美術館)



目黒区美術館では、2020年10月24日から11月29日まで、筆者の担当で、コレクションによる展覧会を開催した。当初は、館蔵品に加え、遺族からの資料借用を前提としたある作家の特集展示を計画していた。しかし新型コロナウイルスのパンデミックが深刻化し、関係者の関与の大きい内容は支障があるという判断より、テーマの変更を余儀なくされた。通常なら、展覧会のテーマそのものを直前に変更することは困難だが、幸い館蔵品中心の展示であったため、対応可能であった。コロナによる緊急事態宣言という前代未聞の状況下の5月、現在の我々の最大の関心事は何か、それはコロナであり、これは私たちの命と生活を脅かし翻弄しているの思いから、「LIFE—コロナ禍を生きる私たちの命と暮らし」という展覧会の内容を着想した。

ところで、2018年より、東京23区内の区立美術館が集まり「東京・区立美術館ネットワーク」という連携活動を行っている。東京2020オリンピック・パラリンピックの開催に際し協働しようというアイデアから始まり、年に数回会合を持ち、2019年度には参加館を紹介するチラシを制作した。2020年には、オリパラ期間中に周遊してもらうスタンプラリーチラシの制作を計画していた。

しかし、2月に入ると日本におけるコロナの感染者数が増加し、2月の末頃からは多くの美術館の臨時休館が始まる。3月24日にはオリパラの中止が決定され、4月7日に緊急事態宣言が発出されたことは周知のとおりである。

日本において、東京はコロナ禍の震央と言える。この動揺は、大規模館であれば潤沢な財力や人力で対処可能でも、中小規模の区立美術館にとってはその衝撃は大きい。区立美術館ネットワークでは、以前より導入していたメーリングリストを活用し、参加館同士で、自館のコロナ対応の事例を紹介し合い、情報共有を重ねてきた。5月25日に宣言解除となるが、日本博物館協会のガイドラインとは別に、開館再開対応のアンケートによる情報収集も行われた。区立美術館の身の丈に合った対応を探るためである。6月4日には、初めてのオンライン会議を開催。インターネットを活用しながら、ネットワークとしての活動を継続させている。このような状況下で、コロナ禍に共に手を携え助け合ってきた区立美術館のメンバーと、この経験をもっと共有できないか。そこで、上述した「LIFE展」のイベントとして、10月9日に、オンラインと対面で、「コロナ禍を生きる区立美術館」と題した非公開の自由討論会を行った。

2月頃から現在までを時系列で振り返りながら、最後は今後の区立美術館のあるべき姿について語り合った。議題の中でも、教育普及活動については熱い意見が交わされた。人数を絞った上でのイベントの再開や、オンライン・ワークショップなど、形を変えながら少しずつ元の活動に近づけるように、各館とも工夫を凝らしながら前進をしている。しかし、オンラインへの安易な依存には、警鐘を鳴らす意見が相次いだ。オンラインによる動画発

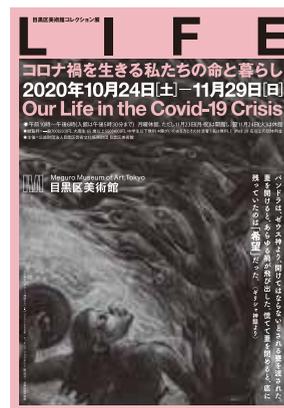
信やワークショップ等は、これまでの活動の当面の代替として行っているものであり、従来の、美術館の現実の空間で、来館者が実物の作品と向き合うことや、プログラム内で多くの人々と実際に交わりながら得られる体験は、オンラインでは完全に補うことはできない。オンラインやデジタルで全て代用可能なら、そもそも美術館自体の存在が不要である。「変えて良かったことと、変えるべきではないことがある」というメンバーの意見に、重みを感じた。

「区立美術館のこれから」については、コレクションとコミュニティの重視という意見に、多くのメンバーが賛同の意を表した。今回のような不測の事態に対し、コレクションの活用は小回りの利く有効な手法である。

また、首都圏においては来館者は公共交通機関での移動が基本であるため、遠隔地に向かない状況も生じる。そのような時に、近所の美術館がその存在意義を発揮する。地域密着型の運営をし

てきた大田区立龍子記念館では、コロナ以後も来館者数に変動がなかったという。地域という地理的枠組みだけではなく、ある分野のコアなファン層もコミュニティと定義できるが、絵本コミュニティの支持を得ている板橋区立美術館も、コロナ禍にあって来館者数を減らしていない。

区立美術館は、規模が小さいがゆえにコロナによる激震の揺れを受けやすい。しかしそれは軽やかにしなやかに動けるということでもある。このような時期だからこそ、もう一度自身の館の活動を見つめなおし、コレクションに目を向け、コミュニティとの連携を強化し、自分たちの本来の強みを活かしていく必要がある。そして、コミュニティという意味では、この区立美術館ネットワークも、またコミュニティなのである。最後に、collectionのcol、communityのcomという接頭辞には、いずれも「共に」という意味がある。この困難な時だからこそ、共に生きなければならぬのである。



目黒区美術館「LIFE—コロナ禍を生きる私たちの命と暮らし」展チラシ



自由討論会「コロナ禍を生きる区立美術館」を対面とオンラインで実施

コロナ禍中での新潟県立美術館の対応

桐原 浩 (きはら ひろし・新潟県立万代島美術館)



本来ブロック全体に目配りして報告すべき本稿だが、未だに県外はもとより県内他施設にも十分に届けられていない。なので、感染症に対する当館(以下、万美)並びに本館の新潟県立近代美術館(以下、近美)の報告で、ご容赦願いたい。

新潟県内初のコロナ感染事例は、2月末に新潟市内で発生し、不安はいきなり身近なものとなった。その当時の両館の状況を振り返ると、長岡市にある近美では所蔵品を中心とした企画展「1964年 東京—新潟」(当初予定1月25日～3月22日)を開催中、一方、新潟市内の万美では「タータン展 伝統と革新のデザイン」(2019年12月14日～3月1日)が終幕直前だった。

県立施設としては、急遽3月2日から休館措置を取ることで、近美は会期3週間を残して展覧会打ち切りとなった。所蔵品中心の企画だったが、時宜に合った主題から多くの取材希望があり、天候もよくなる季節に入って動員が見込めただけに、たいへん残念な決定だった。

片や、万美は展示入れ替えの閉館期間で、直近の影響はなかった。とはいえ、「THE ドラえもん展 NIIGATA 2020」(当初予定3月20日～5月17日)の開会に向けて最終準備が進んでおり、予定どおり開催なのか、中止なのか、延期なのか、そうした整理を最大の課題として担うことになった。長岡の近美も「ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」(4月4日～5月31日)の準備が進行中で、所蔵品の公開も年度が明ければ例年どおりに実施予定であった。

状況を慎重に見極めつつ議論を重ね、両館とも共催メディアと協力し、開館に向けてでき得限りの周到な準備を行った。密を避けるための有効収容人数を計算し、来場者の誘導や入場制限の計画を練るなどである。また消毒や検温体制の確立も喫緊の課題で、この時期、皆様のご記憶にもあるとおり、検温器も消毒用アルコールもマスクもほぼ在庫切れで入手は困難を極めていた。だが、共催メディアも迅速に対応し、協力していただけたことで、開館に向けた来場者の安全確保の体制も整えることができた。

結果、3月27日に、両館の4月1日からの開館を案内できた。万美の「ドラえもん展」については、最終日が5月17日予定で、次の「デザインあ展 in NIIGATA」(当初予定7月11日～9月22日)までに余裕があった。そのため、開幕が遅れた分を取り戻すべく、6月7日までの延長を企画元と相談して調整、再開と同時に新たな会期を知らせることができた。

だが、開館はしてみたものの、4月18日から連休明けまでの休館を余儀なくされることになってしまった。その間、両館とも夏時期の展覧会の開催可能性を検討したが、結局コロナ終息が見えない中では、開催できる積極的な要件は見出せない。そのため、近美では「三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA」展(当初予定7月4日～9月6日)が完成していた印刷物の配付直前で苦渋の中止判断となり、作家ご本人や関係者に急遽連絡、理解

を求めることとなった。万美でも、今夏の大規模企画として位置付けていた「デザインあ展」について、来場者が作品との接触を伴う体験型の内容であるため、見送らざるを得なかった。

これら展覧会の中止決定は、5月12日からの県立施設の再開案内とともに5月8日にリリース。万美「ドラえもん展」と近美の所蔵品展示は再開したのだが、問題は「モリス展」だった。中止の方向で英国の所蔵先や関係機関と連絡を取り始めていたため、改めての開館調整と意思決定に時間が必要だった。再開が叶ったのは5月15日からで、中止期間は約1ヶ月におよんだのである。失われた会期補填のため、閉幕の延長を俎上に乗せようにも、様々な要因から考慮の余地はなく、予定どおり5月31日に閉会せざるを得なかった。

万美では、「デザインあ展」見送りにより夏の会期が空いたこと、開催日数を増やすことで来場者が分散して密が避けられるであろうことから、一度延ばした「ドラえもん展」の会期を更に延長すべく、関係者間で協議を繰り返した。最終調整が済んだのも、5月28日には、8月23日までの再延長(実質会期は109日のロングランとなった)の情報を公開できた。それにより、1度目の延長による会期末に慌てて駆け込む来館者は減り、長い開催期間により来館者数は平準化されることになった。

以上がコロナ禍に対応して、右往左往を強いられ

た両館の状況である。対応できたこと、できなかったこと、他館に比してもほぼ差がなかったと思う。

両館とも4月初におおざと開館した時には、まだ世間はコロナ不安に緊迫しており両館を訪れる来館者も控え目だった。だが、「ドラえもん展」では想定どおり開館前から来館者の列ができ、待望されている感があった。初めは5階美術館フロア内の入場者を厳密に制限することに腐心する余り、1階フロアでの待機列のほうが混み合うといった状況が発生させてしまったが、修正を重ねることで来館者の待ち時間を減らし、安全に誘導可能となった。しかしながら、館と共催メディアの職員が来館者の入場整理や検温に当たり、業務量が増大したのも事実。因みに、「ドラえもん展」会期中の検温で問題視された来館者は1名。暑熱の中、徒歩で来館したためである。

今回、館内にて来館者の様子を見ている時間が多かったせいか、普段以上に来訪した方々の嬉しそうな表情を窺えた気がする。館が当たり前のように、気軽に作品を鑑賞できることがいかに大切か。これからは来館せずに美術館体験や作品鑑賞を楽しめる工夫が徐々に現れてこよう。とはいえ、柔らかに窒息させるような日常を生きていかざるを得ない中、やはり直接美術館に出かけ、作品と対面することは、不急ではあっても決して不要ではないと強く感じている次第である。



新潟県立万代島美術館「THE ドラえもん展 NIIGATA 2020」入場整理の様子

コロナ禍における美術館

青山訓子(あおやまのりこ・岐阜県美術館)



新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、4月の緊急事態宣言によって、国内の美術館は軒並み長期の臨時休館、展覧会の延期や中止を余儀なくされた。県境を越える業務が制限され、調査研究の滞りから今後の事業計画に多大な影響が生じた館も少なくない。再開後も、来館者の検温や施設内の定期的な消毒・清掃、密を避けるための事前予約制の導入などに必要なマンパワーや経費が、長期化するコロナ禍で各館の大きな負担となっている。

東海ブロックで最も早く臨時休館から再開した正会員はパラミタミュージアム(三重県菟野町)である。5月7日から、県外からの来館自粛を呼びかけつつ植物画の「ルドゥーテ展～19世紀植物画の世界～」を開催した。続いて静岡県立美術館、三重県立美術館が5月12日に再開している。三重県、静岡県は感染者数が比較的少なく、特別警戒都道府県に指定された愛知県・岐阜県よりも休業要請の解除が早かった。とはいえ、再開は設立者により方針決定されるため、同じ県内の館でも休業期間は一律ではなかった。

三重県立美術館は、3月の休館中に感染症対策を整え4月1日から開館したが、緊急事態宣言後の4月11日から再休館となった。開催予定の「没後40年 宇田荻郵展」は中止されたが、完成済みの図録から充実した内容の回顧展であったことが伝わる。5月12日からコレクション展を開催、9月の「香りの器—高砂コレクション」展が

2020年度初の企画展となっている。

静岡県立美術館は「開校100年 きたれ、パウハウス—造形教育の基礎—」展開中の4月18日から臨時休館となり、5月12日に県外からの来館自粛を要請して再開。7月の「みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ—線の魔術」展、9月の「富野由悠季の世界展」と続く企画展で混雑緩和のために入場制限を実施した。FacebookとTwitterで混雑状況を随時提供している。開館10周年を迎えた静岡市美術館では、4月11日からチェコのジャポニズムを紹介する「ミュシャと日本、日本とオルリック めぐるジャポニズム」展を開催したが4月20日から臨時休館。静岡市の方針により5月末まで休館延長となり、同展はそのまま閉幕。6月2日から市の所蔵品による特別展示で再開した。

岐阜県美術館では青少年美術展が中止となり、4月予定の「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020」を6月2日～7月5日に会期変更した。「記憶のゆくえ」をテーマに18組の作家が4.8m×4.8m×3.6mのキューブ中に表現する内容で、設営は作家により当初の予定どおりに行われた。続いて、郷土ゆかりの日本画家の回顧展「明治の金メダリスト 大橋翠石～虎を極めた孤高の画家～」展も会期を変更(7月23日～9月13日)、約160点で紹介した。岐阜県現代陶芸美術館では4月予定の「ルート・ブリュック 蝶の軌跡」展を6月から8月に会期変更し、

フィンランドを代表する女性作家の全貌を紹介した。続いて「神業ニッポン 明治のやきもの 幻の横浜焼・東京焼」展(9月5日～11月3日)を開催。明治の輸出陶磁器の実態を優品によって明らかにした。

愛知県美術館では4月3日から浮世絵の巨匠を網羅する「大浮世絵展 歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演」を開催したが4月5日に閉幕。次の企画展は延期となり6月24日まで臨時休館が続いた。9月の「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」が2020年度最初の企画展である。また名古屋美術館は4月以降の展覧会を中止・延期し、11月に着手予定だった改修工事を前倒しして開始、10月末時点で休館継続中である。名古屋市は国内でも感染者数拡大が顕著であり、両館の長期休館はやむを得なかっただろう。一方、豊田市美術館は県内でも早く、5月19日から再開している。開館25周年記念に「VISION」と題したコレクション展を通年で開催中であり、3月開幕の「Part 1 光について/光をともにして」は、6月までの予定を9月22日まで延長した。

また、ステイホーム期間中、各館のオンライン活動が活発化した。作品や展覧会を紹介する動画作成はもちろん、静岡県立美術館の「ロダン体操」のようなユニークな動画も改めて注目されている。

以上のように、各館とも感染症対策に苦労しながら、オンライン活用も含め、コロナ禍における美術館の在り方を模索中である。不安は尽きないが、災いは病気だけでなく、地震や台風など自然災害も常にリスクは在るものであり、それら乗り越えられる「災害に強い美術館」が、疫病に翻弄されるこの時代、最も必要とされるのではないだろうか。

緊急事態宣言による休館から再開まで(岐阜県の場合)

日時	事象
2月20日	厚生労働省「イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ」通知。自粛は要請しないが、イベント開催の再検討を求む。
2月26日	安倍首相(当時)発言「今後2週間に予定されている全国的なスポーツ・文化イベント等について、中止、延期又は規模縮小等の対応を求める。」 文化庁「各種文化イベントの開催に関する考え方について」通知。
2月27日	国立美術館等が臨時休館(2月29日～)を発表。 岐阜県は「県営施設は開館を継続、イベントはすべて中止」と方針決定。
3月	国内での感染拡大顕著となる。 岐阜県では3月17日に最初の新型コロナウイルス感染症の感染者を確認。同月22日に可児市で、31日に岐阜市でクラスター発生を確認。
4月3日	岐阜県「ストップ 新型コロナ 2週間作戦」発信。 岐阜県美術館、岐阜県現代陶芸美術館の4月19日までの休館が決定。各館はウェブサイト、SNS等を活用しながら情報発信を続ける。
4月7日	政府による「緊急事態宣言」。 愛知・岐阜・三重の3県知事が「緊急共同アピール」発表。緊急事態措置の対象である7都道府県への移動自粛を要請。
4月10日	岐阜県、独自の「非常事態宣言」を発表。岐阜県美術館、岐阜県現代陶芸美術館の休館は5月6日までの延長が決定。
4月16日	緊急事態措置の区域、全都道府県に拡大。岐阜県は「感染拡大防止の取組を重点的に進める13都道府県」(特定警戒都道府県)に指定される。
4月22日	岐阜県美術館、公式YouTubeアカウントに所蔵品や教育普及事業を紹介する動画をアップ。岐阜新聞とタイアップし、動画と連動した記事を連載(全14回連載)。その他、所蔵品を用いた塗り絵等、参加型のコンテンツも展開。
5月4日	政府、緊急事態宣言による緊急措置期間を5月31日まで延長。
5月5日	岐阜県、県内における緊急事態措置を5月31日まで延長。県営施設の休館は「当面の間」延長することが決定。
5月14日	岐阜県、緊急事態宣言の対象地域から外れる。
5月15日	岐阜県、「コロナ社会を生き抜く行動指針」を発表。県営施設の再開を5月19日に決定。
5月19日	岐阜県美術館、岐阜県現代陶芸美術館、コレクション展を再開。
5月25日	政府、「緊急事態解除宣言」。



岐阜県現代陶芸美術館「ルート・ブリュック 蝶の軌跡」展会場風景(筆者撮影)

コロナ禍の下で開催された展覧会

松川綾子（まつかわ あやこ・奈良県立美術館）

新型コロナウイルス感染症拡大による影響が甚大となった2020年度上半期、近畿ブロックでもほとんどの美術館が臨時休館を余儀なくされ、展覧会の中止や延期も相次いだ。

こうした中、政府による緊急事態宣言が全面解除となった翌日の5月26日、およそ3年間の工事休館を経て京都市美術館は通称を「京都市京セラ美術館」としてリニューアルオープンした。昭和天皇の「即位の大礼」を記念して1933年に「大礼記念京都美術館」として設立された同館は、公立美術館としては2館目、建築は現存最古という歴史を誇る。ネーミングライツ制度の導入などでも話題を呼んだ今回のリニューアルだが、帝冠様式の建物が持つ荘重な雰囲気や建物本来の機能や構造を生かしながら、新たな施設や設備を加えることで、現代にふさわしい芸術活動の拠点として再生された。開館記念展の一つ「京都の美術 250年の夢 最初的一步：コレクションの原点」（6月2日～9月6日）は、1935年に開催された初のコレクション展「本館所蔵品陳列」を再現したもの。評議員として館の運営にも関わった西山翠嶂や竹内栖鳳ら京都の美術家たちによって選抜された同時代の作品が並び、同館が担ってきた役割を再確認させるものとなった。

京都市京セラ美術館と同様に地域の美術工芸を収集対象の一つとする京都国立近代美術館では、「京都国立近代美術館所蔵作品にみる 京のくらし—二十四節気を愉しむ」展（7月23日～9月22

日）を開催。同館のコレクションから四季をテーマに約270件の作品が精選され、とりわけ工芸部門の充実ぶりが際だった。同じく京都では、京都府京都文化博物館が特別企画展「池大雅—文人たちの交流—」と「木鳥櫻谷と京都画壇 京都三条・大橋家コレクション」展（8月12日～9月22日）を同時開催。前者は、不定期で公開されている京都府所蔵の池大雅美術館コレクションから、後者は、江戸時代中期から続く京都三条御蔵町の旧家・大橋家旧蔵の文化財（同館蔵）の展示。そして京都市立芸術大学芸術資料館では京都府画学校の設立に尽力し初代撰理を務めた田能村直入の中国絵画コレクションを中心とした「南宗憧憬—京都芸大の中国絵画 田能村直入寄贈品を中心に—」展（9月15日～10月18日）を開催。いずれの展覧会も、産官学が連携してその伝統を現代まで受け継いできた京都の豊かな文化的土壌を感じさせた。

各館の周年記念にコロナ禍によって中止された展覧会の代替展なども重なり、今期はコレクションを用いた展覧会が多く見られた。わずか6日間の会期となった兵庫県立美術館の開館50周年記念展「超・名品展」（6月2日～6月7日）は、高橋由一や岸田劉生に同館所蔵の兵庫県ゆかりの作品も織り交ぜて日本近現代美術史を読み直そうという企画だが、さらに「名品」という言葉が纏う前時代的なイメージを払拭して、今日のまなざしを向けてみようという試みでもあった。同じく開館50周年を迎えた和歌山県立近代美術館では、「もうひとつの日本美

術史 近現代版画の名作2020」展（9月19日～11月23日）を開催。日本近現代美術史を「版画」から捉え直そうという本展は、和歌山版画ビエンナーレ展を開催するなど版画の検証に力を入れてきたこれまでの活動の成果で、同館のコレクションに福島県立美術館の所蔵品などを加えて構成されていた。

常設展示室のリニューアルを終えた姫路市立美術館では、95歳となった人間国宝・志村ふくみの歩みをたどる「志村ふくみ展 いのちを織る」（7月4日～8月30日）を開催。改修工事中の滋賀県立近代美術館のコレクションを中心としたもので、紬織りと草木染めという限られた技法によって「聖堂」や「秋霞」といった洋の東西、抽象・具象を超えた多様なイメージを紡ぎ出す織細で豊かな世界が展覧された。美術館の前庭に響き渡る玉鋼火箸（たまはがねひばし）の幻想的な音色も美しかった。西宮市大谷記念美術館では「〈展覧会とコレクション〉2 ひろがる美術館ヒストリー」（7月18日～9月27日）を開催。ワークショップを通じて地域ゆかりの現代作家などを紹介してきた同館の活動を所蔵品とともに振り返った。

昨年の文化財保護法の改正は文化財の保存と同時に活用を促すものだが、オンラインでの美術鑑賞に注目が集まるなど、コロナ禍はオリジナルを美術館あるいは現地で直接鑑賞することの

意味を改めて考える機会ともなった。「よみがえる正倉院宝物—再現模造にみる天平の技—」展（奈良国立博物館、7月4日～9月6日）では、名工たちによって復元された正倉院宝物の模造作品が展示され、経年や罹災にさらされる貴重な文化財を次代に伝える取り組みが紹介された。明治期の文化財政策に端を発するこの模造事業は、1972年以降科学的な調査研究を踏まえた本格的なものとなり、形のみならず素材・技法・構造の再現が目指されている。一方で、デジタル技術を駆使して再現されたのが《大坂冬の陣図屏風》（2019年、凸版印刷制作）である。「大坂冬の陣・夏の陣図屏風」展（大阪城天守閣、7月23日～10月7日）で関西初公開となったこのレプリカは、現存する模写作品などをもとに想定復元されたもので、同館所蔵の《大坂夏の陣図屏風》（重要文化財）と並べて展示され、美術鑑賞とは異なる複製品の可能性が示された。

その他、西国三十三所草創1300年を記念する特別展「聖地をたずねて—西国三十三所の信仰と至宝—」（京都国立博物館 7月23日～9月13日）や、ベトナム出身の現代美術家ヤン・ヴォーの日本初の個展「ヤン・ヴォー—オヴ・ンヤ」（国立国際美術館、6月2日～10月11日）等、渦中にあっても様々な展覧会が実現された。



京都市京セラ美術館（京都市美術館）外観 新設されたスロープ状の広場とガラス張りのエントランス「ガラス・リボン」 撮影：末田猛 提供：京都市京セラ美術館

コロナ禍における 感染症防止対策についての報告 —山口県立美術館 「ハマスホイとデンマーク絵画」展の場合

河野通孝(こののみちたか・山口県立美術館)

この欄の趣旨からはいささか逸脱することになるかもしれないが、このたびは、コロナ禍における美術館の感染症防止対策の一例として、当館のとった対策とそこに至った経緯を記すことで、中国ブロック報告に代えることをお許し願いたい。

4月7日、安倍内閣総理大臣が7都府県に緊急事態宣言を行った。山口県立美術館の「ハマスホイとデンマーク絵画」展が開幕する筈だった日である。「筈だった」というのは、前日の昼過ぎ、県庁幹部も交えた数度にわたる協議をふまえ、美術館休館が既にして決定されていたからである。

そもそも、3月後半における県の方針は強気の「開館」一辺倒であった。「国から示された〈感染対策の在り方の例〉をしっかりと実行し、感染が広がらないような対策を万全に講じた上で、文化施設を開館する」というのである。いたづらに閉館することでコロナ禍の不安を煽るのではなく、「万全の対策」をとりさえすれば、安心して、「通常どおり」活動できるというメッセージを、県立の文化施設の「開館」を通して発信せよというわけである(そもそも、山口県内における感染症発生率は低く、感染経路もすべて捕捉でき、県外からの流入及びその濃厚接触者のみという状況であった)。

どうしても開館したかった我々にとって、この方針はとてもありがたかった。「ハマスホイとデンマーク絵画」展は、7年にわたって、県庁担当課と美術館が一丸となって準備を進め、東京都美術館、読売新聞社のほか、多くの方々のご協力を得てようやく実

現にこぎつけた展覧会だったからである(東京と山口の2会場で開催)。

ただし、この方針は、我々にとってかなりハードルが高いものであった。そもそも件のウイルスが如何なるものか判然としないがゆえに、協議を重ねるごとに、恐怖心が煽られ、「万全」が爆走するのだ。

もちろん、通常の展覧会で感染症が発生する確率は相当に低いと思う。とはいえ、この展覧会はかなり混雑が想定されていた。実は、この展覧会のもう一つの顔は、地方におけるプッチ・ブロックパスター展なのである。地方におけるヨーロッパ絵画展の開催が、その経費の高騰によって容易ならざるものになっている昨今、この展覧会が実現したのは、相当な集客が確実に見込まれるからこそであった。

また、先行開催された東京会場が会期半ばにして中止となったことから、「東京で見られなかったので必ず行く。絶対に開催してほしい。」という県外からの問い合わせが、3月末から徐々に増えてきた。このご時世に県外からの来館はほとんどいないであろうという目算が外れ、「万全」のハードルは日増しに高くなっていく。

さらに、4月に入って以降、緊急事態宣言が視野に入ってくると、今度は反対に、「まさか、この状況で展覧会を開催するつもりではなかろうな!」という類のお叱り電話、メールが、美術館のみならず、県庁の担当課においても度重なるようになってきた。

美術館への「県外からの流入」が、県民の意識に浮上するほどの問題になってきた。美術館が「県外

からの流入」を誘発しているのではないか。こうした声が「万全の対策」の存在をかき消すほどにヒートアップした時点で、休館という決定が県としてなされたわけである。

さて、私たちが練り上げていた「万全」のはずの対策はどうなったかといえば、開催延期となったことで時間的余裕ができ、しつこくブラッシュアップ。あらたに開幕となった5月26日からの2週間、「ハマスホイとデンマーク絵画」展開催のための「錦の御旗」として機能することになる。

その要点は、感染リスクを下げるべく、館内に同時に滞在する人数を徹底して制限することである。

まず、ソーシャルディスタンス2mを確保するために、展示室内に滞在できる観客の上限を120人(展示壁の総延長を2mで割って人数を算出)、展示室内の滞在時間の上限を80分(県庁職員30人によるシミュレーションを2回繰り返し算出)に決定。

また、観客の偏在をある程度抑制するために、展覧会全体をA、B、Cの3つのゾーンに分け、それぞれの滞在時間を30分、20分、30分に設定。その間は必ず各ゾーンにいてもらうことにした。

そして、こうしたシステムを実現するために、入館者を10分毎(最大15人)のチームに分け、それぞれチームごとに色付きの入館証を装着していただき、全員の動きを管理。団体旅行のツアーのようなものである。

例えば、9時30分にAゾーンに入室した15人は、

緑の入館証を胸につけ、10時までの30分でこのゾーンの41点を見なければいけない。この時、Aゾーンには先客2チームも含めて45人。9時40分になると、9時10分に入室していた15人がBゾーンに消えると同時に、入口から次の15人が入ってくる。9時50分にも同じことが起こり、Aゾーンの人数は常に45人に保たれるという具合。ゾーン内ではどこにいても自由だが、早く見終わったからと言って、次のゾーンに入ることは、その人数が増えるので禁止。そして、10時近くになると、スタッフが、緑のサインボードを頭上に掲げて、「緑のチームの方、次のゾーンへどうぞ」と案内する。

相当にお仕着せがましいスタイルである。こんなことで、気持ちよく作品を見ることができるとか。苦情も随分いただいた。そもそも、自由自在に時間を操ることができる展覧会という形式を台無しにしているシステムじゃないか。しかし、意外なことに、多くの人が「慣れてしまえばこれもいいね」というお言葉もいただいた。展示室内の人数が絶対に増えないので作品に静かに集中できるというのである。

新型コロナウイルス感染症は、いまた、不気味な動きを見せている。小康状態を保っている間に、ワクチンができるのを願ってはいたのだが、どうもそんな甘い考えは捨てた方がよさそうだ。となると、存外、このお仕着せがましいスタイルも少しは役に立つかもしれない。



前庭に設置された体温測定所(ここで既に15人1組に編成)



次のゾーンへの移動を促すサインボード

コロナ禍、休館から開館へ

竹崎瑞季(たけざき みずき・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)



2020 年上半期は、疑いもなく新型コロナウイルスに振り回された半年間だった。美術館が多くの人々にひらかれた存在であることが望まれることは裏腹に、文字どおりの意味でさえ、ひらくことの難しさに直面した日々だったと言える。開館すべきかどうか、また、そのタイミングや対策など、各館それぞれが苦戦されたことと思われる。

四国ブロックの正会員では、3月3日に地中美術館(香川県)と町立久万美術館(愛媛県)が休館したことを皮切りに、金刀比羅宮博物館(香川県)の休館が終わる6月30日までの間、それぞれの地域や施設の事情にあわせて休館となった。多かったのは4月中旬から5月連休明けの期間だが、いくつかの館では3月に一時休館し、再開した後、4月に再び休館するケースもあった。新設の美術館として、4月開館を予定していた八幡浜市美術館では、最初の展覧会が8月下旬まで延期された。

当館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館も、改修工事により2019年1月より臨時休館しており、4月18日にリオープンする予定を大幅に延期し、感染対策の上、平日の6月2日に開館することとなった。当館での動きは以下のとおりだった。

- 2月29日 臨時休館中のイベント中止
- 3月30日 休館延長・リオープン延期の決定
- 4月中旬 展覧会スケジュール変更の協議
- 5月中旬 6月開館の日処が立つ
- 5月19日 開館日(6月2日)決定

6月2日 美術館リオープン

休館及び開館の判断は市の対策本部の方針に準ずるとともに、具体的な事業については館で協議を行い、来年度も含めて年間の展覧会スケジュールを大幅に組み替えた。リオープン最初の企画展「猪熊弦一郎展 アートはバイタミン」(6月2日～9月22日)は、担当学芸員がコロナ禍のはるか前に構想したものだが、美術館は「心の病院」であり、よい絵が家に一つでもあれば心のビタミン剤になるとした猪熊の考えを伝える内容は、人々が精神的な不安を抱える状況でより唆暖に富むものになったのではないと思われる。次の「窓展：窓をめぐるアートと建築の旅」(10月13日～2021年1月11日)も、国内外からの作品借用の調整などの影響があったが無事開幕となった。2月下旬にアウトリーチ事業を中心としたイベントの中止が決まった時点では、急速な状況の変化を想像しきれていなかったのが正直なところだった。再びこうした事態が起きないように願いつつ、教訓として記憶の引き出しにしまっておきたい。

さて、この時期の各館のトピックとしては、春頃はどことも休館となったが動画配信の試みも多く見られた。休館のまま閉幕となった高知県立美術館の「収集→保存 あつめてのこす」展(4月4日～5月17日)では、展示の様子を紹介する動画が配信された。自館のコレクションの歴史と未来を真摯にとらえた企画であることが伝わり、見る事が叶わな

かったのが一層惜まれる。香川県立ミュージアムは、全国連携の「おうちミュージアム」に早い段階で参加していた。収蔵品に関わる場所で撮られた動画は、内にこもりがちな日々の中で新鮮に見えた。なお、コロナが少し落ち着いた8月に、近隣の学芸員有志で情報交換した際に共通していたのが、展示室をはじめとする館内各所の通信環境にまつわる課題だった。この災禍がせめて促進剤として、今後のネットワーク環境の整備につながることを期待したい。

夏頃からは、ようやく他館の展覧会も見に行くことができ、各館のコレクションに触れる機会を多く得られた。「高松市美術館コレクション+ 身体とムービング」展(7月23日～9月6日)は、コレクション及び兵庫県尼崎市の「白髪一雄発信プロジェクト」の具体作品が一堂に並ぶとともに、ゲストアーティストとして香川にゆかりのある近藤亜樹や中園孔二の作品も展示され、充実した内容だった。徳島県立近代美術館では、2020年度は開館30周年として3期にわたるコレクションの特集展示が行なわれている。筆者は第2期(7月18日～11月29日)に

観覧したが、収集方針の柱の一つである「20世紀の人間像」のコーナーでは、ピカソやクレーをはじめとする西洋絵画から猪熊弦一郎も含む国内の作品まで、充実したコレクションが展示されていた。人と会うことがままならない中、作品に表れた人々とゆっくり向き合う時間を過ごすことができた。高知県立美術館の「浦上コレクション 北斎漫画」展(8月10日～9月27日)では、コレクションを用いた独自企画として、郷土作家である絵金(絵師金藏)の特集展示を行っていた。北斎の緻密な描写力に吸い込まれた後に、絵金の自由奔放さに驚く。二者の表現をあわせて見ることで差異とともに独自性が浮かび上がり、それぞれに会い直したような感覚だった。

新型コロナウイルスの感染状況は、この号が出る頃のこともまだわからない。展覧会は開幕できたが、人と関わる活動や外に出ていく活動も見通しが立たないままである。コロナ禍で実感したのは、個人はもちろん、場所や地域によっても意識や感覚が大きく異なることだった。近くの人、そして遠くの人をことを想像しながら、再び対面できるようになる日々に向けて、ひらくことを取り戻していきたい。



高知県立美術館「収集→保存 あつめてのこす」展覧会動画



高松市美術館「高松市美術館コレクション+ 身体とムービング」会場風景 撮影：宮脇慎太郎 提供：高松市美術館

コロナと水害、美術館と展覧会

林田龍太(はやしだりゅうた・熊本県立美術館)

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大で幕を開けた。いや、なかなか幕が開かなかったと言った方が正確かもしれない。

筆者が勤務する熊本県立美術館について記しておこう。県内での感染拡大状況を鑑みて、当館は2月28日からの休館が決定。当初休館は3月15日までの予定であったが、以後も状況収束の兆しは見られず、最終的な休館期間は「当面の間」とせざるを得なかった。3月20日より予定していた特別展「モダンアートニッポン!—ウッドワン美術館名品選—」は再開館の可能性に賭け、展示を完了させた状態での開会延期となったが、いつ開会できるのか、先を見通すことができない。休館中は展示作品の一部を紹介する動画をTwitter上にアップするなど、再開館に向け期待を高めるための取り組みを行ったものの、これが空振りに終わる可能性は十分にあり得る。砂を噛むような日々が続いた。

当初の開会予定日より1ヶ月半ほどが過ぎ、開会をあらかじめかけた5月6日、県の判断にもとづき連休明けの7日からの再開館が可能となった。来館者への検温やヘルスチェックシートの準備、それに受付へのビニールシートの設置や床面への順路案内など、職員総出で準備を整え、どうにか開会にこぎつけることができた。当館の開館は全国的にみても早い方だったようで、準備中からマスコミ各社が取材に訪れた。

会期は46日間から9日間へと大幅に短縮する

ことになったものの、自粛明けの開放的なムードも相まってか、「不要不急」の展覧会にも関わらず最大で1日あたり591名の方が来館。玄関前での検温等や展示室への入場制限及び整理券の配布、講堂やロビーでの待機場所の設置等、全職員が対応に追われた(県文化課からも応援部隊が派遣された)。展示室内の人数を50名に限定したこともあり、最大で2時間ほどの待ち時間も発生したが、クレームはほとんどなく、アンケートに記された来館者の満足度も高いものであった。

無論、来館者数や満足度の高さのみをもって「当館が人々に必要とされている証左」などと断じることができない。だがそれでも実感したのは、いかなる状況下でも人々は常に美しいもの、珍しいもの、面白いものを求めているということであった。我々美術館が働きかけ、大切にすべきは、人々のそうした気持ちなのではないか。少なくとも、展覧会のために来てくださる方々の期待を裏切ることには、美術館としてあってはならない。単純ではあるが、非常事態の中で改めて原点に立ち返ることが出来たように思う。もっとも、今後の特別展の在り方や感染防止対策の見直しなど、検討すべき課題は山積しているのだが。

さて、コロナ禍に続き熊本に大きな打撃を与えたのは、7月の人吉・球磨地域の豪雨水害である。この水害により多くの方が犠牲になったが、同時に寺社、それに博物館施設も大きな被害を受けた。熊本県文化課、それに熊本被災史料レ

スキューネットワークを中心に、直ちに文化財レスキューを開始。4年前の熊本地震の経験を踏まえて、対応は迅速であった。古文書や植物標本などの様々な文化財が被災する中で、美術工芸分野では仏像や神像などが大きな被害を受けた。これら被災文化財のレスキューに一役買ったのが、県内各館が過去に行った悉皆調査と、それに基づいて開催した展覧会及びカタログであった。

その場所にもどのような文化財があり、それらがどのような価値を有するのか。このことは、日々の地道な調査・研究によってのみ明らかになり得る。そして展覧会は、地道な積み重ねをまとめ、一般に公開してゆく行為といえよう。展覧会は一過性のイベントだが、その際に刊行されたカタログと、そこで取り上げられた文化財の情報は、広く受け継がれてゆく。平時であれば調査・研究の意義、それに展覧会の集客効果が疑問視されることもしばしばだが、有事の際には大きく役立つのだ。「不要不急」とされる我々の活動に、「備え」としての

意味がある事は、災害が頻発する今日こそ、さらに重視されるべきだろう。

最後に、九州ブロックの展覧会活動についても記さねばならないが、この状況では遠出もままならない。見たい展覧会は数多くあるものの、他県はおろか他市の展覧会すらも見ることができずにいる。一つ取り上げるとすれば、熊本市現代美術館における「ライブ 生きることは、表現すること」展(5月21日～6月14日)であろう。この展覧会は東京でのオリンピック・パラリンピック開催(延期になってしまったが)にあわせ、障がいのある方々や高齢者による作品の展示を通して、表現の多様性や生と表現行為の不可分性を提示したものである。そして同時に、同館の2代目館長であった故・南郷宏氏企画による展覧会「Attitude」のコンセプトを引き継ぐものでもあった。「Attitude」展ほどのインパクト溢れる演出はなかったものの、原点へと戻ろうとしている(かのように見える)その姿勢には、エールを送りたい。



再開館後の熊本県立美術館玄関の様子(5月8日)

保存研究部会では前回の報告以後、第54回会合を2020年2月27、28日に鳥根県立石見美術館にて開催した。和田浩氏（東京国立博物館学芸研究部保存修復課環境保存室室長）による講演「文化財輸送環境の保全」では、輸送路（陸海空路）が与える振動衝撃の研究報告がなされ、振動軽減のための梱包方法などをご教示いただいた。事務局からは保存研究部会が関わる川崎市市民ミュージアム救済活動について現状報告がなされた。翌28日は企画幹事の左近充直美・南目美輝両氏（鳥根県立石見美術館）に収蔵庫を、木原義博氏（鳥根県立いわみ芸術劇場館長）に同劇場大ホールをご案内いただき、複合施設として隣接する劇場と美術館の連携についてご解説いただいた。新型コロナウイルス流行の兆しもみられたことから、時間短縮など感染拡大防止を意識した会合となった。

2020年度の第1回会合は、同ウイルス感染拡大防止のため開催を見送っている。当年度第2回会合は2月頃を予定していたが、12月に入り開催の中止が決定された。



第54回会合（鳥根県立石見美術館）

保存研究部会では部会員間のメールによる意見交換が活発で、このたびのコロナ関連の情報交換及び報告はおおよそ100件近くに上る。はじめは2019年度末から各館の休館情報や勤務体制の変化（リモート・テレワークの運用方法等）であったが、次第に展示室・展示ケース・作品への消毒の有無やその手法といった当部会の研究分野とリンクした内容へ移行する。ICOMやCIMAM、日本博物館協会が発表した報告書やガイドライン、国立感染症研究所等の研究機関からの報告、入手が難しかったエタノールではなく市販の洗剤を希釈して使用するという実用的な情報も共有された。ウイルスを完璧に除去・消毒する必要はない（少量のウイルスでは感染しないという研究報告による）といった助言も日々の業務のストレスを軽減させるものであった。

今回の感染症流行によって、改めて情報交換や館同士の横のつながりの重要性を感じた次第である。当流行が収束、または今後共存していく中で、会合や情報交換会が実施できる日が来るよう願っている。



バックヤードツアーの様様（鳥根県立石見美術館）

日本各地に次々と美術館が誕生したバブル期から約30年が経過し、改修工事のために休館する美術館が増加傾向にある。それに併せて、教育普及活動のプログラムの見直しや再整備を検討するタイミングでもあるのではないかと。そのような問題意識から当部会では、2020年2月20日、21日にかけて福岡市美術館にて、「社会によりコミットした美術館の未来像」をテーマに、2019年度第2回（第53回）会合を開催した。本稿では、本会合の概要を報告させていただく。

会合1日目は、部会員とオブザーバーあわせて34名が参加し、九州地方にある4つの美術館の活動事例を紹介いただいた。まず坂本善三美術館の山下弘子氏からは、シリーズ「アートの風」vol.9 坂崎隆一展「裏を返せば」及び「おいしいもので作る善三展」の概要を、次に福岡市美術館の鬼本佳代子氏からは、休館中のアウトリーチ活動について、続いて直方谷尾美術館の市川靖子氏からは、「子どもスタッフ」の活動について、最後に、つなぎ美術館の楠本智朗氏からは、地域ぐるみの住民参加型アートプロジェクトについて、それぞれお話を伺っ

た。いずれの発表も、地域における美術館の在りかたを問い直すものであり、継続的な地域との連携や、活動の蓄積について改めて考えさせられる内容であった。人口流動が少ない地域はややすると保守的で、暮らしも単調になりがちだが、美術館はそこに風穴を空け、そこで暮らす人々や見慣れた風景を変える可能性を大いに秘めていると思った。

2日目は、部会員とオブザーバーあわせて28名が参加し、ICOM京都2019で決議延期となった博物館の新定義をもとに、社会によりコミットした美術館の未来像について車座になって議論した。新定義が理念的かつ長文であるため話題が多方面に拡がり、若手からベテランまで、参加者全員が自分たちの経験や問題意識を元に発言できた。なお、本会合のより詳細な報告は、全国美術館会議ホームページの当部会の活動報告に掲載されているので参照されたい。

次回会合は、2020年12月に初めてのオンライン会合を実施した。開催に至るまでの流れや会合の詳細は別途改めて報告したい。



第53回会合（福岡市美術館） 1日目の様子



2日目の様子

情報・資料 研究部会

川口雅子（かわぐちまさこ・国立西洋美術館）

情報・資料研究部会は2017年度以降、全国美術館会議正会員所蔵のアーカイブズ資料に注目し、その全国的な所在調査に取り組んできた。各館にどのようなアーカイブズ資料群があるか、つまりどのアーティストの手紙や日記等が保管されているかを調査し、可能な範囲において可視化することを目指している。2020年11月に開始した第1次アンケート調査では、196の正会員から405件の資料群に関する回答が寄せられた。約半数の正会員にご協力いただいたことになる。本テーマに関する学芸員の関心の高さを推し量ると同時に、多忙を極めるなか調査にご協力いただいた関係各氏にこの場を借りて感謝申し上げたい。

さて当初の計画では、第1次調査の集計と分析の後、年度内には第2次調査へと進む予定であった。しかし予想をはるかに上回る回答数があり、加えてコロナ禍の影響もあって、計画修正を余儀なくされた。今年度は集計完了までとし、第2次調査及び国内アーカイブズ資料群所在情報公開の方策の検討は次年度に持ち越す予定である。

一方、コロナ環境下での美術館のオンライン・サービスに注目が集まるなか、国内美術館・博物館、図書館等のデジタル・コンテンツの統合検索を可能にする「ジャパンサーチ」に関して進展があった。

ジャパンサーチでは、データ提供を希望する機関は分野・地域の「つなぎ役」を通じて連携することが望ましいとの方針が打ち出されている。そのため国の機関、あるいは地域を通じて参加できる一部の例外を除いて、美術館がジャパンサーチに連携する手段はないに等しかった。そこで美術館に対して参加の道を切り開くべく、本会議が全国の美術館を取りまとめる「つなぎ役」の役割を引き受けることになった。当部会はその補佐を務めることになり、2020年8月にはいち早く愛知県美術館及び東京富士美術館のデータ連携を支援することができた。今後も各館の参加を支援し、それを通じて美術作品情報へのアクセス向上を推進していきたい。

小規模館 研究部会

坂上義太郎（さかうえ よしたろう・BBプラザ美術館）

周知のように今年に入って以来、日本全土に新型コロナウイルス感染症が蔓延し、全国的に美術館での展覧会が休止や中止、延期の措置がとられるなど大変な状況が生じた。小規模館加盟館でも同様の対応がなされた。

ようやく今日では、事前予約制や1日の入館者数を限り、各館の機能に合わせた感染防止策を講じることで展覧会が行われている。

このような余波を受け、2020年度に予定していた小規模館研究部会の研修会も新型コロナウイルス感染症を考慮し、仕方のないことだが、次の機会に譲ることになった。

当初に予定していた内容は次のとおりである。

「アート・アーカイブの取り組み事例について」（仮）
講師／慶応義塾大学アート・センター
アーキヴィスト 久保仁志氏

「収蔵庫内の作品及び資料整理について」（仮）
講師／和歌山県立近代美術館
主任学芸員 植野比佐見氏

序でながら、現状を鑑みると次回の研修会で、新型コロナウイルス感染症が美術館運営に与えた色々な事象や現状と今後の在り方などを議論する機会を設けるのも一案だろうか。

何れにしても主幹事館を担当させていただいた当館にとっては、今年度はまさに変則的な年になってしまった。

また、2020年8月には小規模館研究部会長の上 藪四郎氏（笠岡市立竹喬美術館）が退かれ、新たに坪井則子氏（佐野美術館）に部会長に就いていた。この誌上を借り、上藪氏にこれまでの部会を牽引して下さったことに感謝を申し上げ、今後は新部会長である坪井氏を中心に、厳しさを増す中での小規模館研究部会の更なる活動に当たっていききたい。

美術館運営制度 研究部会

安田篤生（やすだ あつお・奈良県立美術館）

今まで年2回ペースで部会会合を行ってきた美術館運営制度研究部会（以下「MRG」）も、2020年はコロナ禍の影響でそうもいかず、メンバー間の連絡はほぼメールでのやり取りであったが、11月16日にほぼ1年ぶりの会合を全国美術館会議事務局にて開催することができた（オンラインでの参加者も含む）。

とはいうものの、MRGの活動がコロナ禍で停滞していたわけでもなく、2020年度（2021年3月開催予定）学芸員研修会の企画を担当していることもあり、いろいろと動きは続けていた。2020年9月から10月にかけて正会員に向けて実施した「新型コロナウイルス感染拡大防止対策における美術館の入館者対応に関するアンケート」は、MRGが実働部隊となって企画・発送・集計のすべてを行ったものである。これには会員の6割強にあたる253館から回答をいただくことができた。ご協力くださった皆様には、この場を借りてお礼申し上げたい。集計結果については、分析ののち何らかの形で（全国美術館会議ホームページにて）報告したいと考えている。

学芸員研修会は、2021年3月5日に東京・国立新美術館で開催する方向で準備を進めている。感染拡大防止の観点から定員を限らざるを得ないため、オンラインで参加できる方向も検討しているところで、「アフターコロナの美術館活動」への手掛かりになるような内容にできればと考えている。本誌掲載号が出るころには、具体的な開催要項や参加方法を全国美術館会議ホームページで発表できているのではないだろうか。

コロナ禍という世界規模の災厄もあって、前回（本誌17号）で報告した「表現の（不）自由」をめぐる活動予定の内容と、いささか異なっているのは致し方ないと言える。ただ「リスク」を乗り越えて「美術館のこれから」を考えるという点では、大きく変わったわけでもないと思う。まずは3月の学芸員研修会を無事に実施したい。

地域美術 研究部会

藤崎綾（ふじさき あや・広島県立美術館）

地域美術研究部会では、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針及び目標のもと、これまで活動を行ってきた。毎年2回、春、秋に会合を持ち、2014年11月に東海ブロックで開いた第1回を皮切りに、2019年度までに11回にわたって開催してきたが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため活動を休止した。当部会は、事例発表だけでなく作品の実見も大きな見どころで、ウェブでの開催が難しいという状況もある。

現在は、2019年度をもって全国美術館会議の10ブロックすべてで部会を実施したことから、これまでの発表をまとめた報告書の作成を検討している。なお2021年度は、総会に合わせて、春に京都で開催予定である。

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
 会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社	
カトーレック株式会社	
株式会社伏見工芸	
ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社	
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	アート印刷株式会社
イセ文化財団	イカリ消毒株式会社
AGC グラスプロダクツ株式会社	M&I アート株式会社
株式会社NHKエデュケーショナル	株式会社ギャルリーためなが
株式会社NHKプロモーション	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
株式会社加島美術	読売新聞東京本社
協同組合美術商交友会	ライトアンドリヒト株式会社
株式会社グッドフェローズ	
株式会社クレヴィス	
株式会社廣濟堂	有限会社アート・フリース (大阪美術)
金剛株式会社	株式会社アートローグ
JOPD株式会社	影山 幸一
進和テック株式会社	株式会社学研プラス
せとうち美術館ネットワーク	公益財団法人かながわ国際交流財団
一般社団法人全国美術商連合会	湘南国際村学術研究センター
公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団	株式会社求龍堂
大日本印刷株式会社	株式会社キュレイターズ
株式会社DNPアートコミュニケーションズ	株式会社生活の友社「美術の窓」
株式会社東京美術倶楽部	株式会社丹青研究所
凸版印刷株式会社	株式会社T Tトレーディング
株式会社トップアート鎌倉	トライベクトル株式会社
ピープルソフトウェア株式会社	美術年鑑社 新美術新聞
株式会社美術出版社	
有限会社丸栄堂	
株式会社ユニークポジション	
株式会社レンブラント	
早稲田システム開発株式会社	

広報委員会の発足について

理事 富田 章 (東京ステーションギャラリー)

全国美術館会議の広報活動は、昨年度まで「機関誌部会」と「ホームページ部会」という二つの研究部会が担ってきました。ただかねてより両部会は、その活動内容に鑑みると研究部会というよりは全国美術館会議の広報部門とも言うべきもので、事務局との関係も非常に深いことから、研究部会として活動するのではなく広報部として活動の方が合理的ではないか、という意見が根強くあったため、2020年2月の理事会において、両部を合体する形で広報部とすることが提案され承認されました。その後、両部会のメンバーが議論を重ねる中で、専門委員会の中に広報委員会として置いた方が、活動もしやすく、立場も明確になるとの意見が大勢を占めたことから、本年2月1日の理事会にこれを提案し、本年4月1日より広報委員会を発足させることが異論なく承認されました。これによって位置付けが明確となり、事務局や各委員会、研究部会とも密接な連携をとりつつ、より無駄のない活動を行なっていくことが可能になります。

広報委員会の活動は、機関誌『ZENBI』の発行とホームページの運営が中心となります。改めてその活動内容を簡単にご紹介しておきます。

機関誌では、全国10の地域から美術・美術館にまつわる話題を報告してもらったブロック報告や部会報告、正会員館紹介などのコーナーがあり、「全美フォーラム」では会員諸氏のエッセイを掲載しているわけですが、これらは単なる「今」の報告や「旬」の話題というだけでなく、その蓄積が美術館や美術を取り巻く状況を物語るアーカイブになっているという点でも大きな意味を持っています。会員諸氏には今後とも原稿執筆への積極的なご協力をお願いする次第です。

ホームページは、全国美術館会議からのお知らせなどをお伝えすることが大きな使命ではありますが、年2回発行の『ZENBI』を補完する役割をも担っています。たとえば各研究部会報告では『ZENBI』よりも詳細な内容が掲載されていますし、過去の学芸員研修会の内容やプログラム、災害対策の概要や活動記録、これまでに発表したステートメントなども記録として掲載しています。まだご覧になったことのない方は、ぜひ一度ご覧ください。

広報委員会を構成するのは全国美術館会議に所属する有志であり、その点は研究部会と変わりません。コロナ禍のために編集会議等ままならない状況が続いていますが、オンライン会議などを活用しながら、全国美術館会議からのメッセージ発信を途絶えさせることのないよう委員一同努めてまいります。会員諸氏のより一層のご理解とご協力をお願い致します。

新しい日常下における全国美術館会議のいろいろ

企画担当幹事 大越久子 (おおこしひさこ・埼玉県立近代美術館)

合言葉は「新型コロナウイルス」に終始した2020年。合言葉は未だ過去形にならず、正会員のそれぞれが感染症対策と折り合いをつけながら活動を再開し、継続の努力を積み重ねています。

アクセルとブレーキの両方を踏みながら、と称される社会の動きは、そのまま美術館界にもあてはまります。その状況の一端は、美術館運営制度研究部会が学芸員研修会のために行った「新型コロナウイルス感染拡大防止対策における美術館の入館者対応に関するアンケート」調査の結果にも読み取ることができます。3月に開催予定の同研修会のテーマは、2019年度の一大事の一つであった「あいちトリエンナーレ」問題から転換して、新型コロナウイルスを主軸とする方向に決まりました。各研究部会も、参集がかなわない状況にありながら、オンラインを活用して活動の継続に努めています。

さて、6月28日に開催しました臨時社員総会については前号でご報告いたしましたので、今年度夏以降の当会議の動きについてご報告いたします。

8月19日、建畠会長から理事宛に提案がなされた1.定款一部変更(事務局を台東区から千代田区へ)、2.臨時社員総会開催(2020年9月13日)、3.専門委員会委員の選任(前企画委員の退任に伴う後任として、教育普及研究部会長:小坂智子長崎県美術館長、小規模館研究部会長:坪井則子佐野美術館長、地域美術研究部会長:速水豊三重県立美術館長、広報部長:富田章東京ステーションギャラリー館長)、4.賛助会員入

会審査、5.外部機関からのセミナー等の協力依頼への承認(文化財保存支援機構セミナー)、6.理事会ウェブ会議導入、の6件の議案のうち、4の賛助会員入会の審査を除く5件について、理事全員から同意を得ました。賛助会員入会審査については、今回の理事会で検討することとなりました。

また、企画委員同様に災害対策委員の退任に伴う後任として、濱崎礼二宮城県美術館副館長兼学芸部長、副田一穂愛知県美術館学芸員が就任しました。

新任の委員の方々にはいずれも全国美術館会議の運営にとって重要な役割を担っていただくこととなります。ご多忙とは存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。

9月13日には、アルカディア市ヶ谷において、臨時社員総会が開催されました。

総社員数394名のうち出席社員の議決権数290名(内訳:本人出席14名、書面による議決権行使276名)により、定款第28条の規定に基づき馬淵理事を議長に選出して、定款の一部変更について審議し、290の賛成をもって原案が可決されました。引き続き、第3回理事会が開催され、山梨副会長を議長に1.主たる事務局の移転、2.賛助会員入会審査、の2件の議案を審議し、1.主たる事務局の移転については、前の臨時社員総会で議決された定款の一部変更に伴い、主たる事務局の「所在地」及び「移転する日」が意義なく承認されました。2.賛助会員入会審査については、「個人会員同様に推薦制が必要」

ではないか、という意見が多く出たことから、次回の検討課題となりました。報告事項では建畠会長から「業務執行理事の職務執行状況報告」、専門委員会から雪山企画委員長及び村田災害対策委員長による活動報告がありました。なお、この理事会では初のウェブ会議を導入し、会場出席8名に加え、5名の理事がオンラインで出席しました。今後は臨時理事会の機会も増えてくると想定されており、ウェブも活用して活発な議論が行われることが期待されます。

さて、昨年度は川崎市市民ミュージアムの救援活動につきまして多くの正会員のご助力を得ましたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、4月以降は支援を休止しています。その後、川崎市と市民ミュージアムは主体的に作品の処置に邁進し、6月をもって地階収蔵庫からの搬出作業が完了しました。被災から1年間にわたる救出活動の一端が同館のホームページで公開されていますので、ぜひご覧ください。肉体的、精神的に厳しい負担を強いられながらも着実に作業を遂行してきた同ミュージアムの皆さまの労に心から敬意を表します。復旧作業はまだまだ続きますので、今後どのような協力ができるのか、当会議として

も検討してまいります。

また、文化庁の要請により、デジタル・ネットワーク技術を活用して情報アクセスを充実すべく著作権法第31条の見直しを図る「図書館関係の権利制限規定の在り方に関するワーキングチーム」のヒアリングに応じ、美術専門図書館の立場から意見を提出しました。

そして、上記にありますとおり、9月13日に開催された臨時社員総会及び理事会の承認を得て、事務局は9月20日、晴れて事務所を移転いたしました。平成19年以来13年間にわたって国立西洋美術館に事務局を置かせていただきましたので、上野を離れることに一抹の寂しさはあったものの、これで名実ともに一般社団法人として再出発する体裁が整ったといえます。東京メトロ半蔵門線の半蔵門駅、有楽町線の麴町駅に近い便利な場所にありますので、小規模の会合や会員の親睦の場としても遠慮なくお使いください。なお、移転に伴う諸手続きに追われたことから、事務にやや遅れが生じました。ご迷惑をおかけした皆様にお詫びを申し上げるとともに、引き続き全国美術館会議の運営にご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

広報委員会設置と今後について

広報担当 尾崎信一郎 (おさきしんいちろう・鳥取県立博物館)

これまでホームページ部会と機関誌部会として研究部会の一翼を担っていた二つの部会はこのたび広報委員会として改組され、企画委員会と並ぶ専門委員会の一つとして全国美術家会議の広報活動を担うこととなりました。この経緯については新しく広報委員会の委員長に就任いただく富田章氏の文章を参照していただくこととして、今年

度の広報の具体的な活動と広報委員会設立に向けての準備会議についてあらためて簡単に報告いたします。

本年度も対面とリモートを交えつつ、既に何回かの会合が開催されました。すなわち4月13日と8月6日にはホームページ担当と事務局によるリモート会議が開催され、ホームページの今

後の在り方について協議がなされました。一方、機関誌担当も7月19日に国立国際美術館で『ZENBI』第18号のための編集会議を対面で開催いたしました。第18号を9月1日に発行した後、機関誌担当幹事と富田氏、事務局の初めての顔合わせとなる会議を10月28日、移転してまもない全国美術館会議事務局の新しい事務所で開催し、ホームページ担当と機関誌担当の位置づけや仕事の分担について協議しました。続いて11月14日、兵庫県立美術館にホームページ担当幹事、機関誌担当幹事、事務局の三者が集まり、今後

の活動の内容について具体的な協議を進めました。今後はかつての二つの部会は広報委員会のホームページ担当と機関誌担当として協力して、全国美術館会議の広報を担当することとなります。協議の詳細については12月7日に開催された研究部会幹事会に報告するとともに、研究部会の幹事の皆様にも協力をお願いしました。

ホームページと機関誌の円滑な運営、発行に関しては全国美術館会議正会員職員と研究部会関係者の絶えざる関心と協力が必要です。引き続き皆様の支援をお願いいたします。

編集後記

『ZENBI』の19号をお届けする。ブロック報告の目次を見て驚くのは、10本の原稿のうち、8本までの表題の冒頭に同じ言葉が書きつけられていることだ。本誌の発行を続けてほぼ10年となるが、全国の美術館が等しくこれほどの苦境に立ったことは初めてであろう。

まさにコロナ禍の最中に全国美術館会議は一般社団法人化された訳であるが、記念すべき京都での総会も来年に延期されるイレギュラーな状況の中での船出となった。一般社団法人化の経緯については、事務局として尽力いただいた国立西洋美術館の末武さんから17号に引き続き所感をお寄せいただいた。新しい体制に対しても正会員各位の変わらぬ支援をお願いしたい。全美フォーラムのこのほかの記事は全てコロナ禍と関連している。部会報告も従来に比べて報告の文字数が少ないが、これも同じ理由で定例の活動ができなかった部会が多かったためである。同じ苦境を編集部も味わっており、定例の編集会議が開催できなかったために、本号の発行は通常より若干遅れることが予想される。あらかじめお詫びするとともに、まことにパンデミックへの対応に終

始した1年であったことを実感する年の瀬を過ぎつつある。

この文章を書いている時点においても第3波と思われる感染の広がりが続いており、展望は開けていない。もはや美術館は新型コロナウイルス以前に戻ることはできないだろう。今号の全美フォーラム、そしてブロック報告には各地の美術館や展覧会において試みられた様々な取り組みが記されている。それぞれの美術館で働く方々に本誌がなんらかの発見やヒントを与えることができれば嬉しく思う。

フォーラム中で報告されている徳島県立近代美術館の展覧会に私も最終日に出かけた。報告の中にあつたとおり、多くの困難を乗り越えて実現された展覧会であり、美術館や展覧会に関する関係者の深い信頼によって初めて可能となった展示を見て私は感銘を受けた。同じような努力が各地で続けられていることは、フォーラムやブロック報告に寄せられた記事からも明らかであろう。このような難局にあつて果たして美術館は人々に希望を投げかけることができるか、今、あらためて私たちの仕事の意味が問われている。(O)

『ZENBI』では、次の要領で 広く皆さんからの原稿を お待ちしております。

[原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・全国美術館会議正会員の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・第20号(2021年7月発行予定)については4月30日、第21号(2022年1月発行予定)に関しては10月31日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)
aoyama_k@nmao.go.jp (青山)

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館内
(一社)全国美術館会議広報部 幹事 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0857-26-8042

ZENBI

全国美術館会議機関誌

投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議正会員の職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則としてメールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは（一社）全国美術館会議広報委員会（以下「広報委員会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は（一社）全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

NISSHA

EMPOWERING YOUR VISION

美術品管理システム Artize MA

NISSHA 独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた 収蔵作品（資料）管理のための高機能データベース

「Artize MA（アルタイズ・エム・エー）」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

<http://artize.nissha-comms.co.jp/>

担当：石濱・相筈 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3 075(823)5151



文化財と人と環境を第一に。

文化財保存分野に参入してから40余年、守り続けたものがある。

長年の経験と実績により、博物館・美術館等それぞれの施設環境に合わせた文化財IPM(総合的有害生物管理)プランをご提案いたします。

調査・診断

現状調査・診断／設計
原因究明・検査／分析

防除・メンテナンス

モニタリング
殺虫／殺カビ
IPM メンテナンス

その他サポート

教育研修支援
IPM 構築支援
関連商品販売

環境エンジニアリング 全国100事業所

IKARI **イカリ消毒株式会社** <https://www.ikari.co.jp>

本社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL. 06-6636-2741 FAX. 06-6636-2720

丸栄堂

美術商

日本画・洋画・工芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<http://www.marueido.com>

IPMを取り入れた保存環境づくりと
虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



調査・診断

- ▼博物館・美術館・図書館・寺社等の環境調査
- ▼調査セットによる環境調査
- ▼昆虫や微生物の同定
- ▼生物の被害調査・診断

資格・認定



- ▼文化財虫菌害防除作業主任者
- ▼文化財IPMコーディネータ
- ▼文化財虫菌害防除薬剤等認定

コンサルティング

- ▼保存環境・防除薬剤

防除処置

- ▼殺虫・殺菌処理の受託
- ▼燻蒸効果判定



研修・普及

- ▼文化財の保存に関する研修会・講習会
- ▼図書の出版



公益財団法人文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F

TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.jp